

# マスロー心理学研究会《第104回》定例会 発表資料

2021(令和3)年 7月10日

発表者：河野 憲一

【 自主発表 】

## マスロー心理学の限界と課題

マスローは複雑な人間の欲求について階層構造を示すことによってシンプルに説明した。このことは分かりやすいが、かえって誤解も生むことになった。

ここでは、マスロー理論について重箱の隅をつつくように小考していくが、一隅に光を当てることから本質が見えてくる。

(注：文中の下線部は筆者による。また、引用文献表記については、編者が筆者の承認を得て、目立つように「丸ゴシック体」に、変更した。)

### 1 マスロー心理学の限界

#### (1) 人間は神の被造物

マスローは、本能を悪としてとらえるべきではなく、その本性は善であるか、それとも中立的なものであり、したがって、元来これは抑圧されるべきものではなく、逆に解放し、尊重せられるべきものと考えるのである。人間は神の被造物として、自然の中に生きている。人間、わけても児童は、本来、自然の法則にしたがって生成発展をとげてゆくものであり、自然の自己発展にほかならない。

(上田吉一「第六章 超越論 第一節 自然主義的人間観」『人間の完成』誠信書房 1988年、188頁)

本能を善か中立的なものとするのはマスローの希望である。生きる営みには動物的・利己的な本能を抑えている部分もあり、善を含んだ悪も、悪を含んだ善もある。浄も穢れも共に働きあう「正円にして淨穢合成せり」(入法界品)である。ブッダによれば区別は存在せず、偏ることも拘ることもない「中道」になろう。そもそも人間の脳は欠点をゼロにすると長所も弱くなる性質がある。欠点を直し、善いところだけを都合よく取り出すことはできず、人間として見れば偏る。

また、「人間は神の被造物」なのか。児童は「自然の法則」に従って生成発展を遂げるのか。人格の成長には葛藤や克己といった心的活動が欠かせないが、それも人間の独自性ではなく、自然自体が発展していくことか。自然と対峙して生まれた欧米の個人主義、人格尊重といった人間主義はどこへいったのか。

キリスト教は進化論を否定し、旧約聖書では絶対神が神に似せて人間を造り、自然を支配させたとする。人間は自然の支配者であり、自然に従って成長するものではない。東洋思想では自己の奥底に自然(宇宙)があり、真の自己(大我)がある。自然や宇宙といった大いなる

ものつながり、万物が神になる。自己すら自然の法則に包括されていることを覚る。人間の成長を創造主や自然の法則に従うことだとすることは、欧米の神観と東洋の自然観を混同してないか。

## (2) 欲求の現れ方

欲求階層では特定の欲求が100%満たされて、はじめて次の一段高次の欲求に移行するのではない。ある程度の割合で満たされれば、次の欲求が出現する。

現実に人びとは、ある欲求、たとえば生理的欲求についても、愛情欲求についても、あるいはその他のどの段階の欲求についても、部分的に満足し、部分的に不満をもっている。ただ欲求ヒエラルキーを上昇するにつれて、満足度が減少するといえる。たとえば任意の数字を当てはめてみると、ある人は生理的欲求の85%、安全欲求の70%、愛情欲求の30%が満たされているという形をとっている。そしてここで生理的欲求が90%まで満たされ、安全欲求、愛情欲求もそれぞれ80%、50%に達すると、はじめてこれまで存在しなかった尊重欲求が10%顔を出すという形になるのである。もし愛情欲求以下の満足度がさらに高まる場合には、たとえば尊重欲求が30%、自己実現の欲求も5%出現するという具合になるであろう。

(上田吉一「第二章 欲求論 第三節 欲求階層論の特質」『人間の完成』誠信書房、1988年、48頁)

下位欲求がある程度満たされなければ高次の尊重欲求は出現しないとす。だが、必ずしも下位欲求が満たされていなくとも、どのような逆境下であれ、愛する人を大切に思い、希望を持ち他者も自分も尊重して生きることが出来る。

欲求は単純に階層を上昇するのではなく、自己実現の欲求が最も少ないというものでもない。ある時は生理的欲求よりも所属と愛情欲求に強く支配されている人もおり、生理的欲求の中にも自己実現の欲求を合わせもつ人もいよう。

## (3) 高次欲求の機能的自律性

人間にとって厳しい逆境や時には限界状況ともいわれるような苛酷な場面に遭遇して、なおも高次の精神的欲求の中に生きることのできる人もある。このような存在は、欲求階層論からはいかに説明し得るのであろうか。

これは、低次欲求の早期における継続的満足が、高次欲求支配の人格をもたらすことがあるという事実で、説明することが可能である。(略) マスローも「愛情や人気の喪失に最もよく対抗のできる人は、強くて健康な自律的人間である。だがこの強さや健康はといえば、普通のわれわれの社会では、幼時における安全、愛情、所属、尊重などの恒久的満足により、もたらされるものである」(Maslow, A. H.; Motivation and Personality, Third Edition, Harper & Row, New York, 1970, p. 31.)と述べている。(略) 「ひとたび高次欲求水準に達し、それにとともなう価値や好みを獲得すると、それが自律的になり、もはや低次の欲求満足に依存しなくなる。このような人びとは、『高い生活』を可能ならしめた低次の欲求満足を軽蔑し、はねつけるかもしれない」(前掲書、p. 42.)と述べて高次欲求が反復して満足せられることにより、この高次欲求自体が低次欲求から独立して、機能的自律性を獲得することを強調しているのである。

幼児期において安全、愛情、所属、尊重などの欲求が恒久的に満足されて育った者がどれほどいようか。欲求満足のできる環境で育った者しか厳しい逆境や限界状況において高次の精神的欲求の中に生きることができないのか。

むしろ幼少期にある程度の欲求不満足の実験をすることで逆境を乗り越えるバネが育つこともあるのではないか。高次の精神的欲求の出現は幼児期の欲求満足が決定的ではなく、どのような逆境も反面教師としてとらえたり、未来に希望や目標を持ったりするといった「認識」(知性・理性)の力によって自己を気高く活かしていくことができることもあるのではないか。

低次欲求の満足については、「その欲求を軽蔑したり、はねついたりする」ものであろうか。欲求にさげすまれる欲求はなく、その欲求を満たしてくれた他者との関係性にも感謝を忘れないことで人格が高まりゆく。どの欲求も人間の生存や成長に必要なものであり、生理的欲求は低次な欲求だとさげすまれるものではなく、生理的欲求に所属や愛情の欲求、自尊の欲求が複合して出現することで質的に高度な満足が得られることになる。

欲求の機能的自律性では、他の欲求が消滅しているのではなく、今出現しているその欲求には他の欲求も内包されて存在しているのである。「見えないところにもある」。欲求は消滅しているように思えても、意識の深層(無意識)では他の欲求共々存在している。

#### (4) 基本的欲求の超越

基本的欲求の超越。(これに二つの方法があり、一つは、欲求を満足させることによって意識から順当に消滅させる方法であり、一つは欲求満足をあきらめ、欲求を克服する方法である。)換言すれば、「まず、高次動機づけること」である。そして、それは価値との同一化を示している。

(A. H. マスロー著、上田吉一訳「第二十一章 超越のさまざまな意味」『人間性の最高価値』誠信書房、1989年、320頁)

基本的欲求の超越には、欲求満足により意識から消滅させることと逆に欲求満足を「諦める」ことによって欲求を克服する方法があるという。高次価値に動機づけられれば低次欲求は問題とならず、意識から消失するというが、基本的欲求を諦め、いきなり「まず、高次動機づけること」などできるのか。

これは欲求を順次満たしていくことにより自己実現へと向かうといった階層論と矛盾する。諦観による欲求の超越は東洋思想である。晩年になり、超越を論じる頃には影響を受けてゆらぎが生じたのか。諦観とは理性的な認識であり情動的な欲求とは異なる。超越には知性の働きも認めているといえよう。

#### (5) ゆらぐ欲求階層論

欲求階層論は明快に述べられているが、同時に固定的ではないともされる。

欲求階層論に立てば、欲求を一步一步満たしてゆくことによって、はじめて自己実現が達成されることになる。すなわち、ある欲求の満足は、より一段と高次の欲求の出現をもたらす、この欲求の満足は、さらに高次の欲求の出現を促すといった経過を

たどり、その間に人格は次第に高次の欲求に支配され、自己実現に到達すると考えられているのである。（上田吉一『自己実現の教育』黎明書房、1985年、39頁）

根本的な問題として、欲求の階層が、必ずしもこの五つの欲求に類別され、また階層順に配列されるとは限らないということである。換言すれば、欲求をあまり固定的に考えるべきではないということである。（略）マズローの理論を金科玉条に受け止めて、生理的欲求の次は安全欲求、安全欲求の次は必ず所属と愛情の欲求というように、ステレオタイプに階層構造を考えるべきではないであろう。（略）マズロー自身も次のように断っているのである。「これまでわれわれはヒエラルキーが固定した序列であるかのように話してきたが、実はわれわれが述べてきたほど、とてもそんなに固定的なものではない。」（Maslow, A. H.; Motivation and Personality, Third Edition, Harper & Row, New York, 1970, p. 26.）

（上田吉一「第二章 欲求論 第三節 欲求階層論の特質」『人間の完成』誠信書房、1988年、50頁）

ヒエラルキーが固定した序列であるかのように話してきたことについて修正している。欲求は、固定的でも階層的・序列的に存在するものでもない。

## （6） 研究動機と手法

彼にとって二人の先生は、高知能であるばかりでなく、人間的にも素晴らしい魅力の持主であったからである。この二人の先生というのは、彼が学位をとって西部からニューヨークへ出てきてから師として仰いだルース・ベネディクトとマックス・ヴェルトハイマーである。マズローは、これらの偉大な人物をできるだけ詳細に研究しようと思ったが、彼のこれまでの心理学の知識は全く役に立たなかった。そこで、彼は科学以前の素朴な方法で、これらの人物をそれぞれ観察しては丹念にノートに記録していったのである。

（上田吉一「第四章 自己実現論 第二節 自己実現的人間の特性」『人間の完成』誠信書房、1988年、105頁）

自己実現者の研究動機は尊敬する二人の師であったが、その手法は科学以前の方法、つまり観察という主観によるものであった。これではどんなに主観を排除して客観的資料を得ようとしても観察者の思いが入りこむ。

人格としての最高度の発現、したがってまた人間形成の究極目標をよくとらえているものといえよう。ただその半面として、その記述はまだ観念的で具体性に乏しいきらいがあり、今後ともさらにその内容の充実が期待せられるのである。

（上田吉一訳「訳者あとがき」『完全なる人間』誠信書房、1986年、295頁）

第三の時期は、1960年代で、この時期にマズローは、心理学的健康の問題から、至高経験の問題へ、さらに存在の問題、超越の問題へと思想を展開し、人間の最高価値を究明しようとする意欲を見せたのである。彼はもはや、心理学一般からはもちろん、彼自身の心理学からさえも、これを超え、著しく哲学的、宗教的色彩を帯びるに至ったといわなければならない。

（上田吉一「訳者あとがき」『人間性の最高価値』誠信書房、1989年、473～474頁）

マズローの自己実現論の手法は観念的であり具体性に欠け、科学的根拠が乏しいとされる。このため心理学としてより、むしろ生きる希望や指針を与える哲学や思想として語られるほうが受け入れられやすいであろう。

## (7) 自己実現者の割合

被験者は、個人的な知人や友人、現存する公的人物や歴史上の人物から選ばれた。大学生も三千人ばかり調査の対象としてとりあげようとしたが、選考の結果、該当する者は唯一名に過ぎず、可能性のある者も数十名にとどまった。彼の考えているような自己実現をとげた人物は、年長者にはみられても、若い人たちの間には容易に認められなかったのである。その結果、大学生に関してはマズローの所属する大学の学生から最も健康と思われる一パーセントのみ選ぶことになった。

(上田吉一「第四章 自己実現論 第二節 自己実現の人間の特性」『人間の完成』誠信書房、1988年、105～106頁)

自己実現をとげていると思われる人に該当した人物が学生3000人の中で1名だとすれば30万人の学生の中では100名になる。大学入学共通テストを受けた学生約53万5千人の中で自己実現を遂げている人は178名になる。最も健康と思われる学生についても1%とは極めて少なくほとんどいないように思えるが、受験生の中で健康と思われる人は5,350人になる。単純には計算できないが、かなりの方が健康的であり、自己実現者であることになる。

精神的に健康な自己実現者の姿を至高経験のうちに見出すことにより、自己実現する人は、特殊な人に限られるものではなく、一時的ではあるがある程度まで万人に見られることを示した。

(上田吉一訳「訳者あとがき」『完全なる人間』誠信書房、1986年、295頁)

自己実現者は極めて希少なのか、万人に見られるのか。この数字には科学的・統計的な根拠と信憑性が問われる。

## (8) 自己実現者

これまで、自己実現する人間について多くの特徴を述べてきた。自己実現する人は、大なり小なりこれらの特徴を備えていることは疑いないが、しかし彼らがこれらの特徴をすべて備えているかというところではない。そのような人は現実にはいないし、またたとえいたとしても、それは却ってまともな人間にはならないであろう。人は誰でも、自分が不完全であることを自覚している。それゆえにこそ完全なる人間を求めるのであるが、そこに描かれた理想的人間像は、まさに神のごとき存在であるか、それとも現実ばなれのした幻想に過ぎないのである。

実際のところ、マズローのとりあげた自己実現する人間も、さまざまな点において欠点だらけの人間なのである。

(上田吉一「第四章 自己実現論 第三節 自己実現する人間の不完全性」『人間の完成』誠信書房、1988年、1.44～145頁)

いかなる自己実現をとげたB認識や至高経験の体験者といえども、日常生活の大部分では、なお欠乏欲求中心のD認識の世界に生きていることを看過してはならない。

彼らもまた、満員電車で眼の色をかえて座席を確保しようとしたり、高額税金やボータスの低さに不平不満を述べたりする平凡な人間である。悟りを開いたかのような心境になるのは、彼らといえども極めて例外的な経験なのである。ただ単なる凡人と異なるところは、結局B認識の相対的な頻度にあるといわなければならないのである。(上田吉一・「第五章 認知論 第三節 至高経験にともなうジレンマ1『人間の完成』誠信書房、1988年、185頁)

…あたかも完ぺきな人間ができあがってしまうかのようなイメージでとらえてしまって、往々にして、肉体をもった人間の限界を超えているかのようにしか見えない場合があると思うんです。

だけど、それは意識のなかでそういう気持ちになっただけであって、そういう人物も、肉体をもっているかぎり、飯は食わなきゃいけないし、トイレに行かなきゃいけないし、さまざまな気持ちに悩まされることがある。そのへんのことごまとうに押さえられていないと思うんです。そのために、自己超越というのが人間的感情の喪失に映ってしまうんだと思うんです。

だけど、僕が思うのは、トランスパーソナルの心理学でもいわれていることなんだけど、そういう境地は、人間的感情の喪失では絶対はないということですね。人間的感情がより豊穡になりこそすれ、喪失してしまうのではない。悩みがゼロになるわけでも、完ぺきな行動ができるわけでもなく、そういったことにあまり煩わされない心境なんですね。

(吉福伸逸『トランスパーソナルとは何か』春秋社、1989年、43頁)

自己実現者・自己超越者といった神のような理想的人間は現実には存在しない。われわれは、悟りを開き、煩わされない理想的人物像に憧れ、想像した。

## (9) 劣った人間、優れたひと

劣った人間が優れたひとを高く評価するか、少なくとも優れたひとを憎まず、彼らに対して攻撃を仕掛けないような状況でなければ、どんな社会もうまく立ち行くことができない。また、優れたひとがその他の人びとの自由意志によって選ばれるようでなければ、いかなる社会、いかなる企業も効率的に機能することはできないのである。(アブラハム・マズロー著、金井寿宏監訳『完全なる経営』日本経済新聞社、2001年、234頁)

優れた人が劣った人を包み込み愛他的になるのではなく、劣った人間が優れた人を選択することを求めており、本末転倒している。マズローは自己実現的人間の特徴に二分法の超越を挙げたが、劣った人間と優れた人間を作った。

百人の人間に対して十人分の食糧しかなく、九十人は餓死するよりほかないということになれば、私は自分が絶対に九十人の中の一人にならないようにするだろう。そして、かつての豊かな社会で機能した道徳観や倫理観をかなぐり捨て、弱肉強食の社会に適合した考え方に乗り換えるのはまちがいない。

(アブラハム・マズロー著、金井寿宏監訳『完全なる経営』日本経済新聞社、2001年、129頁)

自己犠牲は崇高な道徳的行為にもなる。だが、マズローは生理的欲求が充足されないのに他者など構っておれない、というように自身の欲求階層論に従う。マズローは自己実現者を

研究したが、自身は自己実現者とはいえない。

## 2 マスロー心理学の課題

### (1) 長所

マスローは、人間性自体のうちにある可能性を実現することによって、いわゆる「完全なる人間」にまで到達してゆくところに教育の存在を認めているのである。彼は、次のようにいうのである。「教育の機能、目標——人間主義的な目標——は、究極的には、個人の自己実現、完全なる人間になること、人類あるいは特定の個人が到達し得る最高の高さまで成長すること、平たくいえば、人間が自己のなり得る最高の存在になるのを助けることである」と。(Maslow, A. H.; 1971. The farther reaches of human nature. The Viking Press. New York, p. 168.) (上田吉一「教育の理念と心理学」上田吉一、塩見邦雄編著『最高人格への道』川島書店、1991年、8頁)

マスロー理論の長所として次のことが挙げられよう。

- ① 漠然としていた欲求を「階層」で表すことで分かりやすくなり、「衣食足りて礼節を知る」の如く、欲求を満たすことの重要性が受け入れやすい。
- ② 欲求満足の教育  
欲求を肯定的に捉え、人間成長への教育や支援に新しい視点を投じた。
- ③ 「欲求満足、愛情欲求、成長欲求、自己実現…」という語句自体に夢がある。  
誰もが「欲求を満足させることで自分は自己実現できる」と思え、「完全なる人間」像が目標になり、生きる希望になった。このため臨床に携わるカウンセラーやセラピスト、教育者に歓迎された。

### (2) 夢物語

彼の到達した結論は、「人間は、それ自体最高の価値をもっており、人間をして人間を超える可能性を含んでいる」ということであつた。彼は、人間もまた、条件さえよければ、神のような存在になり得るものである、と考えた。

(上田吉一「訳者 あとがき」『人間性の最高価値』誠信書房、1989年、471頁)

人間は条件がよければ神のような存在になり得るとする。理想が輝けば輝くほど現実から乖離していく。自己実現論は現実から遊離し、綺麗ごとの人格論にうっとりするような究極の「自分探し」になっていないか。

以上、本書を貫くマスローの思想を概観してきた。人間が、自己の主体性を失い、ともすれば、生きがいのない生活にはまり込もうとする今日、このマスローの主張は、あるいは夢物語のようにとらえられるかもしれない。だが、われわれはまさにこのような状況に生きるからこそ、人間としての主体性と自信とを、何としても回復しなければならない。環境にうちひしがれた現在の人間は、勇気をもって明日の人間へと成長をとげてゆかねばならない。マスローの教えるところは、現代に生きるわれわれにとって、この上ない激励として、受け止められるのである。

(上田吉一「訳者 あとがき」『人間性の最高価値』誠信書房、1989年、480頁)

上田吉一氏は人間としての主体性と自信の回復のためにはマスローの優れた理論と理想を求める強い思想性を認めながらも、夢物語のようにとらえられるかもしれないと指摘している。では、マスローはどのように捉えているのか。

…私は、それが、経験的な探求であって、私が認知したものを報告したおり、私が作り上げた夢ではないことを主張しなければならない。それらを、科学的（きわめて多くの人にとって、発見よりも、証明を意味する言葉）と呼ばずに、前科学と呼べば、私の自由な探求や確認、仮説に関して、科学的な不安を取り除くのに役立つと気がついた。いずれにせよ、この論文において断言した事柄はすべて、原理上検証可能であり、是非を証明することができるのである。

(A・H・マスロー著、上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房、1989年、348頁)

自身の経験から報告したものであり、夢ではなく、自由な仮説であり科学的な不安を取り除くため、「前科学的」としている。すべて検証可能だとするが、同じ事柄でも追体験し認知する主体者が変われば結果も微妙に変わるであろう。マスローは性善説を前提として完全なる人間像を帰納法的に理論構築したが、かなり演繹的に導き出したのではないか。夢や幻想とされないためには、より現実的な根拠を示しながら哲学、思想として確立していくことであろう。

### (3) マスローの本意

マスローは「自己実現」という用語のもつ欠点として次のように述べている。

(a) 愛他的というより利己的な意味が強いこと。(b) 人生の課題に対する義務や献身の面が希薄なこと。(c) 他人や社会との結びつきをかえりみないばかりか、個人の充実が「よい社会」にもとついている点を看過していること。(d) 非人間的な現実のもつ強要的性格や本質的魅力、興味を無視していること。(e) 無我と自己超越の面がなおざりにされていること。(f) それとなく能動性を強調し、受動性、受容性についておろそかにされていること、である。わたくしが注意深く努力して、自己実現する人が愛他的で、献身的で、社会的であるなどと経験的事実を述べても、これはそう受けとられるのである。

「自己」ということばは、人を敬遠させるようである。それで、再定義したり、経験的に説明したりしても、「自己」は「利己的」で単に自己中心的なものと考える言語上の牢固とした習慣に対しては、どうにもならないことが多い。のみならず、失望を禁じえないのは、さる賢明で有能な心理学者が自己実現する人の性格について、わたくしが経験的に語ったことを、発見したのではなく、勝手に作りあげたものであるかのように主張していることである。

(Maslow, A. H. ; Toward a Psychology of Being, Van Nostrand, New York, 1962・上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房、1964、4頁)

裏を返せば、マスローの求めた自己実現者像の本意は次のようになるろう。

- (a) 利己的よりも愛他的な意味が強い。
- (b) 人生の課題に対する義務や献身の面が濃厚。
- (c) 他人や社会との結びつきをかえりみて、個人の充実が「よい社会」にもとづいている点に着眼する。



- (d) 非人間的な現実のもつ強要的性格や本質的魅力、興味を重視する。
- (e) 無我と自己超越の面を重視する。
- (f) 能動性を強調するが、受動性、受容性についても重視する。

マズロー自身は最初から欲求の階層図を想定していた訳ではない。また、階層の順序をけっして固定的には考えていない。欲求階層図には固執しておらず、欲求の階層順図を逆にしてもよく、むしろ自己実現の欲求が最下部にあるとも修正している。自己実現の欲求が各欲求の最下部にあるとき、この欲求が各欲求の質を高め、人間を人間らしくあらしめるのではなからうか。

#### (4) マズロー心理学・上田心理学の継承

マズロー理論の欠如部分を批判するだけでなく、目指そうとしていた行き先を知り、補強・継承していくことこそがその道を行く後進に求められよう。

マズロー心理学は、人格構造のメカニズムに関する精緻な分析に関してフロイトに一步ゆずるとしても、積極的な人間性肯定の哲学がもつ思想的意義は絶大なるものがある。それは、人間がどこまで可能性をもつかを明らかにするものであり、人間性の法則を、成長の最高段階においてとらえようとする発想にもとづいているのである。これは、おそらく精神分析学が精神医学や臨床心理に与えたと同様に、あるいはそれ以上に、教育学や人間福祉に関する諸科学のうえに今後測りしれない寄与をなし得るものであろう。

人間性の真の解放と、その結果としての自己実現人格の達成は、人間のもつ最高目標であり、理想である。換言すれば、完全なる人間への到達は、人類の悲願であるといっても過言ではない。それは単に個人的願望であるばかりでなく、社会体制や教育のありかたを規定する人間的原点でもある。人間尊重の社会は、自己実現を可能ならしめる形に組織化せられねばならないであろうし、教育もまた、この自己実現の達成をめざして、その実践が具体化されねばならないのである。ともあれ、新しい文化は、人格の自己実現を中心に展開せられねばならないものと考えられる。とすれば、人間性の自己実現に関する研究は、その基礎を築く最も重要な課題といわなければならない。

(上田吉一『自己実現の心理』誠信書房、1985年、213～214頁)

松山哲也氏はマズローの自己実現理論の長所として、大胆な発想で論を発表することによって今までの行動主義や精神分析とは違った新しい人間関係論を展開することが可能になったとする。だが、欠点としても、次を指摘している。

- ・極めて思いつきの発想で論じているため、深い議論がなされていない。
- ・臨床家や教育者ではなかったため、彼の優れた理論を彼自身が実際の場面で用いることはなかった。

(松山哲也「マズローの自己実現理論の現代的検討～欲求の「意識化」と「対象化」をキーワードに～」人間主義心理学会発表、及びマズロー心理学研究会第 回例会、共に発表年・月不明)

欲求満足があってもなぜ自己実現の欲求が発現しないのか。この問題に対し、松山氏は、欲求満足のために欲求が麻痺状態にあることから、欲求を意識化、具体化させることにより高次の欲求へ目覚めさせていくことが課題だとする。いずれも知的作業であり、自己実現を、

欲求という情動の側面だけではなく、意識化という理性を介することで欲求の発現を促そうとするのである。意欲的にマズローの欲求論を検証しながら、継承し、超えていこうとしている。

マズローは心理学の第三勢力である実存的・人間学的心理学の旗頭の一人で、動物や病的な人格よりも成熟した健康な人間について研究すべきだと主張した。1908年に生まれ、1970年に没した。62歳。

上田吉一氏はマズロー理論を日本に紹介した第一人者である。1925年に生まれ、2005年に没した。行年81歳。

アブラハム・マズロー博士、上田吉一博士、両氏の意志を受け継ぐ本研究会としては、これからこの世に生まれてくる人たちのためにも普通人間を含めた総合的人間論として安寧な人間存在のあり方を探求していきたい。